

読者の声

読者の皆さまから寄せられた
『aff』12月号のご意見や感想を紹介します。

❏ 鳥獣被害防止のために地域ぐるみで活動されている様子がよくわかり、興味深かったです。(40代・女性)

❏ 鳥獣被害は今、大変深刻な問題だと思っていたので、特集記事で読むことができてよかったです。今度は、住宅地でも問題になっているカラスについても取り上げてほしいです。(60代以上・女性)

❏ ジビエに関して、大変興味があります。首都圏でも食べられる店舗の紹介も掲載してください。(50代・男性)

❏ 「天然の食材“ジビエ”を新たな食文化に」の記事を読み、本当にその通りだと思いました。いろいろなお店で食材として活用されるようになってほしいと思います。(60代以上・女性)

❏ マタギのお話がとても印象的でした。『aff』を読むと、毎回発見があって楽しいです。これからも、どんどん幅広い情報掲載をお願いします。(60代以上・女性)

❏ 私が住んでいる北海道もエゾシカの被害が深刻化しています。ジビエという言葉は、最近になって耳にするようになりましたが、それでもまだなじみは薄いですね。シカ肉がもっと安く手に入るようになればいいのですが。(40代・女性)

❏ 自分の住んでいる地区も過疎地域なので、シカやイノシシ、サルの食害で悩まされています。猟友会の方も年々少なくなっているのが将来が心配です。(50代・女性)

広報誌aff(あふ)の感想をお聞かせください

今後もよりよい広報誌とするため、読者アンケートにご協力ください。農林水産省のホームページ、広報誌affのサイトから回答できます。



放射性セシウムに関する情報について

農林水産省のホームページ
(東日本大震災に関する情報)をご覧ください。
<http://www.maff.go.jp/>
携帯電話用ホームページ
<http://www.maff.go.jp/mobile/>



防疫体制を追求。豚舎、堆肥舎、自動給餌装置などを整備した

きの撤去などの作業を手伝ってくれたほか、三沢基地(飛行場)の米兵たちも休日ごとに家族連れで手伝いにやって来ます。

農家から敷きワラをもらおうお返しとして、それまで提供していた液肥は開発に6年かけたもの。農家の人たちからは「また液肥を作ってほしい」と励まされました。

650頭の豚が生き延びましたが、その後、水やエサが確保できずに譲渡や早期出荷を余儀なくされ、全頭を失うことに。それでも多くの人に助けられながら復旧作業に取り組むうち、「再開しよう」という気持ちが強まりました。

しかし事業再開の費用は多額で借入金も大きくなります。後継者である2人の息子さんにはためら

いもあったようですが、家族でよく話し合い、震災1カ月後に経営再建を決めました。

費用総額は3億9000万円、国の東日本大震災農業生産対策交付金を受けたほか、おいらせ町からの助成金もありました。金融機関の融資を受けられたのは「震災前に土地を確保していたことが大きかった」と言います。

将来の事業規模拡大のために購入していた内陸の土地で2011年9月から建設を始め、震災から1年半後、2012年9月に新たな施設が完成したのです。

新しい畜産技術に対応し短期間で黒字化に成功し

「公的な助成を受けた以上、失敗はできない」という強い思いから、分娩施設を被災前の200頭から220頭に対応できる設備に拡充したうえで効率的な飼養管理システムを導入。種豚交配から人工授精方式への切り替えを進めました。

「息子たちが最新の繁殖技術を学んだことで、国内トップクラスの繁殖成績を出せるようになりました」

1母豚当たりの平均的な出荷頭数は20頭ですが、岩徹養豚では28頭まで上がり、年間出荷頭数は被災前の約4000頭から約6200頭に増加しています。当初計画ははるかに上回り、経営は短期間で

黒字化しました。

「早期に施設を倍の規模にした」と言う徹男さんは「震災後に支えてくれた人たちへの恩返しのためにも、被災したことを逆にチャンスに変えるという前向きな気持ちで、これからはチャレンジしていきます」と語っています。



青森県おいらせ町二川目(ふたかわめ)地区沿岸部も甚大な津波被害を受けた

近隣の支援に応じて再建 繁殖成績がトップレベルに

東日本大震災の津波被害により施設が壊滅、豚をすべて失った
有限会社岩徹養豚。周辺住民などの温かい支援を受け、
家族が結束して経営再建を果たし、震災前をしのぐ出荷頭数を達成しています。

文/下境敏弘



飼育しているのは繁殖能力の高いニューシャム(ハイブリッド豚)。愛情をこめて育てている

海岸近くにある養豚場でエサの準備に取りかかったそのとき、津波の到来を知らせる叫び声が聞こえました。青森県おいらせ町の有限会社岩徹養豚、代表取締役の岩崎徹男さん・幸子さんご夫婦は急いで軽トラックに飛び乗り、背後10mに迫った津波から間一髪で逃れました。

廃業を思いとどまらせた
近隣の人々の支援

1977年に起業し、当初50頭だった母豚を200頭にまで増やした岩徹養豚でしたが、6棟の豚舎のうち5棟が全壊して、1500頭が津波にのまれてしまいました。あまりの被害の大きさに「呆然として廃業を覚悟した」という徹男さんを踏みとどまらせたのは近隣の人たちでした。

震災後、自発的に集まった人たちが、逃げ出していた豚を懸命に集めてくれたのです。

その後も、近隣の人たちが駆けつけた多くのボランティアががれ

以前から確保していた海岸から2kmほどの山間の土地に建設した養豚施設



青森県おいらせ町
有限会社
岩徹養豚



左から、次男の徹さん、妻の幸子さん、岩崎徹男さん、長男の大輔さん